

教職入門「学校見学」における、学生の能動性を高める取り組み[†]

南 伸昌*・黒尾 裕子**
宇都宮大学教育学部*
宇都宮市立東小学校**

教育学部の学部専門教育科目「教職入門」の、公立小における「学校見学」において、昼休みの活動案を受講学生が事前に作成し、自分たちが主体となって子どもたちの活動をサポートする取り組みを行った。事前準備を含めて初めての体験で、戸惑うことも多く負担感は大きかったが、アンケート調査から、能動的に取り組み、やりがいを感じた様子が伺えた。また、他のグループと比べて、教職志向が高まるという効果も見られた。

キーワード：小学校、学校見学、生徒指導、能動性

1. はじめに

「教職入門」は文字通り、本学における教職課程の入口であり、教師の視点で教育現場を見直し、理想とする教師像を確立することを目標としている。授業は主に、附属幼小中特支の教員や高校教員経験者から各学校の話聞く「講話」、公立小学校及び附属小中学校で観察・参加を行う「学校見学」、それらの活動や文献を元に、グループごとに議論を深め「理想の教師像」を模索する「グループ活動」の3つの活動から成っている。このうち、公立小学校における「学校見学」は「①昼休みの子どもたちとの触れ合い（遊び）」、「②授業観察／参加」、「③振り返り」が基本的な形である。

今回、1年生Dグループが活動した、宇都宮市立東小学校（以下「東小」と）の事前打合せの際、「校庭の使用に制約があるため、昼休みの活動（①）は数名の学生が教室でクラスの面倒を見る形で」との提案をいただいた。教員養成のカリキュラムにおい

て、現場経験を早い時期に積ませることは全国的な流れでもあるので[1]、受講生に「活動案」を事前に作成させ、指導体験に臨ませることとした。この活動を次年度の授業改善に繋げるため、事後に受講生アンケートを取り、学生自身の活動に対する評価を調査した。また、教職入門受講者に対するアンケートのうち、教職志向の変化に着目し、通常の活動を行った他グループの結果との比較を行った。

2. 児童の状況と活動内容

東小は、1～5年生が1クラス、6年生が2クラスの計7クラスであるが、各学年40名程度なので、学年ごとのまとまりで学生が担当することとした。学生は20名で、特に低学年の児童対応に慣れていないことが予想されたので、1、2年生には4名ずつ、他の学年には3名ずつ配属した。それぞれの学年において、取りまとめ役として学生の代表を1名ずつ指名した。

活動内容は、学年や学生の特性を考慮して決定した。1年生は、遊戯的な要素を入れた方が無難ではないかと考え、音楽系団体に活動している学生が4名いたので、音楽分野の学生を中心として音楽的な活動とした。保健体育分野の学生を含め、体育系団体に活動している学生が6名いたので、2学年で体育を行うこととした。担当学年については、学生がどこまで加減できるか判らない部分があったので、安全面を考慮して、5、6年生とした。6年生にはバ

[†] Nobumasa MINAMI* and Yuko KUROO**:
Efforts to enhance students' activeness in 'school observation' in 'seminar on introduction to teaching'.

Keywords: elementary school, 'school observation', guidance, active

* School of Education, Utsunomiya University

** Higashi Elementary School, Utsunomiya City
(連絡先: minami@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

レーで活躍している児童が何人かおり、学生にもバレーの熟達者がいたので6年生はバレーにした。5年生は学生の特性に合わせてサッカーとした。

他の学年については学生に希望を聞いてみたが、やはり大学1年生では具体案を考えることは難しいようだったので、こちらで「ブンブンゴマ」とした。以前、小学生対象の講座でブンブンゴマを担当した学生がおり、彼を中心に4名を2年生担当とし、他を3、4年生に配属した。

3. 活動案の作成

活動前に、学習指導案の「活動内容」をイメージした「活動案」を作成させた。実施の4週間前に担当及び実施題目を決定し、内容の詳細については学生、東小教諭と相談しながら固めていった。各学年の活動の題目を以下に示す。

- 1年：ボディーパーカッションで演奏しよう！
- 2年：ブンブンゴマ名人になろう！
- 3年：ブンブンゴマを作って、遊んでみよう！
- 4年：ブンブンゴマの達人になろう！
- 5年：サッカーで体を動かそう！
- 6年：みんなでソフトバレーをしよう！

3週間前の授業で、音楽とブンブンゴマの活動案例を提示し、実施の2週間前までに第一案を提出させた。やはり初めは、自分たちの行動をストレートに書くだけに近く、準備物や支援にまで気が回らないようであった。また、「どのように始めるのか」、「どのように終わらせるのか」という意識が薄く、活動の区切りを具体的な言葉で表現するように指導した。最終案の例として、2年生のものを以下に示す。

<活動の流れ>

- ①全体にブンブンゴマ（やり方や様々な種類があること）の紹介をする。
- ②全体で32名のため、8人ずつの班に分ける（学生一人で一班担当）。
- ③白紙のブンブンゴマを配布する。
- ④児童に自由にお絵描きや色ぬりをしてもらう。
- ⑤各自ブンブンゴマが完成したら、回して遊ぶ。
※回せない子がいたら、一緒に回すところから始め、できるように指導してあげる。
- ⑥児童同士でコマを交換しながら、いろんなコマで遊んでみる。

⑦学生があらかじめ用意しておいたいろんな形のブンブンゴマにも挑戦。

⑧最後に伝えたいこと&感想。

※始めに児童から感想を聞いてみる。

※形にかかわらず、いろんなものでも回せることから、発展の余地を伝える。

※作ったコマは各自で持ち帰り、活用するように伝える。

（学生が作ったものは担任の先生と相談し、学校に残すか決める。）

準備：

白紙のブンブンゴマの作成（学生一人最低10個）

様々な種類のブンブンゴマの作成

（ガチャガチャのケース、フィルムケース、ペットボトルの蓋、ボタン）

用具の準備

（色ペン、ハサミ→児童各自が持っている、糸、ひも）

3. 活動の様子と学生の感想

初めに校長先生からお話いただき、担当教諭から活動の説明を受け、クラスごとに分かれた。給食の終わりの時間だったので、各クラスの進行状況に合わせて、学生はクラスに入っていった。

1年生は遊技的な要素が含まれた活動だったので、子どもたちがはしゃいでしまい、学生たちは活動の流れを制御するのに苦労していた。事後の感想からも、「予定通りに運ぶ難しさ」を、全学年の中で一番強く感じたことがうかがえた。その中から、「1人を褒めて皆を注目させる」、「手を叩いて／楽器を鳴らして指示を出す」といった対処方法を見いだすことができたようだ。実際の活動の様子を図1に示す。



図1 1年生の活動の様子。

2～4年生は個別の活動全体を統括する難しさを感じたようだ。作業が始まると1人1人進度が異なり、それぞれの立場から次々に来る質問への対応に追われていた。そして、区切りを付けるタイミングを見付けられず、5時間目に食い込んでしまった学年もあった。こういった苦労を通じて、「3人でも大変な作業を先生は毎日1人で見ている」ことを再認識し、「個別対応のきめ細かさ、全体を把握する力を身に付けたい」等、具体的な課題に気付くことができていた。2年生の活動の様子を図2に示す。



図2 2年生の活動の様子

5、6年生は教室外での活動だったので、準備や活動の流れの中での指示が思ったようにできなかったようだ。実際に指導を行ってみて、事前に活動案を作った際の想定甘さに気付き、流れに応じた指導力の必要性を実感できていた。

全体的に、「想定外」のできごとが多く、「臨機応変」な対応の必要性を感じ、それを日常業務としてこなす、「教師」という仕事に対する理解が深まったようだ。初めに、校長先生から、「まだ君たちは子ども対応が上手くない。それは仕方ないから、上手いかなくてもそれを経験として、今後に活かして欲しい。」というお話をいただいたが、活動を通じて学生たちはその言葉を実感できたのではないだろうか。

4. 学生へのアンケート調査

(1) 本取り組みに対する意識調査

学校見学では、東小における①授業案を作ったの指導、②授業での先生の補助、附属小における③授業観察の、3種類の活動を行った。それぞれの活動について、「教育的愛情を感じた」、「児童理解が深

まった」、「能動的に活動できた」、「負担が大きかった」、「やりがいを感じた」の5観点で、「とてもそう思う／そう思う／そう思わない／全くそう思わない」の4択の調査を行った。「とてもそう思う」を4点、「全くそう思わない」を1点として点数配分し、それぞれの項目について平均を取った結果を表1に示す。

表1 学校見学の調査結果

項目	①	②	③
教育的愛情	3.2	3.4	3.4
児童理解	3.5	3.5	3.5
能動的活動	3.4	3.4	3.2
負担が大きい	2.8	2.0	1.5
やりがいあり	3.7	3.5	3.4

やはり、負担感は①がかなり大きいものとなった。初体験の活動案作成などの事前準備が有り、活動中も大いに戸惑い苦労した結果を反映している。教育的愛情の数値が低めなのは少々以外であったが、自由記述の感想から、活動中の子どもとの関わりは深かったが、次々と対応に追われ、ゆとりを持って接することが難しかった様子が伺える。

能動的な取り組みは、①、②は③よりも若干ではあるが高めで、やりがいは①が大きい数値となっていた。また、①のやりがいに関しては、否定的な回答の選択数は0であった。今回、3、4名の小グループ単位での取り組みだったので、特に準備段階においては、活動への関与に個人差があり、能動的とはいえない学生も見受けられた。しかし、小学校では否応なしに子ども対応に追われ、結果としてやりがいを感じることはできたのではないだろうか。これを裏付けるデータとして、代表を務めた6人の、①に関する平均値を取ったものを表2に記す。

表2 代表の調査結果

愛情	児童理解	能動的	負担	やりがい
3.4	3.8	3.4	3.0	3.8

能動的取り組みに関してはその他の学生と同じ数値であったが、それ以外の項目に関しては数値が大きくなっていった。このことから、学生に適度な責任を与えることにより、負担感は大きくなるが、学びが深まりやりがいも感じられる活動となることが判った。

(2) 教職志向とその変化

教職入門受講生全体のアンケート調査のうち、教職志向の強さ及び、教職入門受講前後での教職志向の変化を抜粋し、Dグループと学校教育教員養成課程全体の結果とを比較したものを図3に示す。教職志向については、左から順番（太枠→点線枠→細枠→灰色）に（1）の4択が対応し、教職志向の変化については、「強くなった／強いまま変化無し／弱いまま変化無し／弱くなった」が、この順序で対応している。

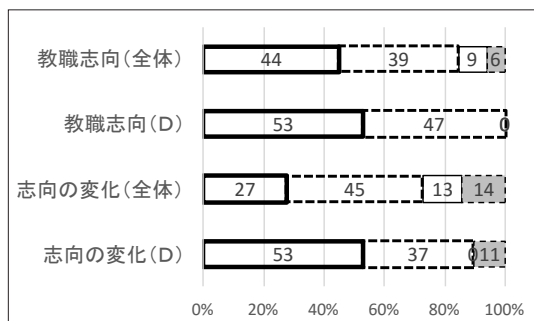


図3 Dグループと全体の、教職志向の比較

授業終了時点でのDグループの教職志向は全体より高く、全員が教員志望であった。特筆すべきは、教職志向が「強くなった」割合で、全体では27%だったが、Dグループでは53%と、ほぼ2倍の高い値となっていた。各グループの学生は、全分野の学生が混在しているので、集団としての偏りは小さいと考えられる。また、東小の学校見学以外は、他グループと同等の活動を行っている。従って、この差は学校見学における取り組みの違いに因るものと解釈できる。小学校での活動に、能動的に取り組む場を設定したことにより、教職志向を著しく向上させる効果が生じたのであろう。

5. おわりに

初めの校長先生のお話にもあったように、先生方には、学生が不慣れなことは前提で、40分間の活動を見守っていただいた。中には、見るに見かねてつつい口出ししてしまう、といったケースもあったようだが、時間配分も含めて、大部分は学生の裁量で活動させていただいた。

教育学部生とはいえ、1年生が学級の活動を取り仕切るとは難しく、全体への目配りが疎かになったり、時間を大幅に超過したりしたクラスもあった。

教育実習のように、通常の授業指導においては、最低限求められるレベルはもっと高く、なかなか自分の裁量を試す機会は与えられないが、今回は、昼休みの活動ということで、先生方にゆとりを持って見守っていただくことができた。

学生にとっては、上手くいかないことが多く、課題ばかりが見つかる体験だったかもしれない。しかし、教職志向の高さ、強まる方向への変化の大きさを見ると、「学校で子どもの集団に、確かに対応した」という経験を通じて、教員の仕事に対するイメージを具体化すると同時に、教員としての自信のようなものが彼らに芽生えたのではないかと考えられる。このような活動を1年生全体に広め、学生の教職志向を高められるよう、次年度以降も検討を進めていきたい。

謝辞

学生に活動の機会を与え、お忙しい中丁寧にご指導くださいました、宇都宮市立東小学校の皆さんに感謝申し上げます。

参考文献

[1] 群馬大学教育学部「教育現場体験学習」など。
http://center.edu.gunma-u.ac.jp/html/teaching_03.html

平成29年3月31日 受理